

もくじ

JPA40 周年記念関連イベントについて	1
ICPA2023 開催報告	4
2023 年夏季セミナー開催報告	5
学会各賞受賞者の言葉	7

■JPA40 周年記念関連イベントについて

恒次祐子(東京大学)

本学会英文誌 Journal of PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY(JPA)が創刊 40 周年*を迎えました。「生理人類学懇話会会誌」から現在に至る経緯については安河内朗先生が本誌 PANews Vol 33, No 2 にまとめてくださっています。また本誌 Vol 32, No 3 の小林宏光先生による「学会賞受賞者の言葉」の記事中には国立国会図書館デジタルコレクションに収録された創刊号へのリンクも紹介されており、創刊に関わられた先生方の想いを垣間見ることができます(なかなか胸が熱くなります)。40 歳といえば JPA もいよいよ中年に入り働き盛りというところでしょうか。本稿では編集担当理事の立場から 40 周年をお祝いして行われた 2 つの行事について報告します。

*2023 年 12 月現在, JPA は No.42 を刊行中。No.1 は「生理人類学懇話会会誌」だったため, No.2 の「生理人類学研究会会誌」から数えて丸 40 周年としています。

1. ICPA2023 JPA 40 周年記念セッション

2023 年 9 月 7~8 日にマレーシア国立大学

サバ校で開催された第 16 回国際生理人類学会議(ICPA2023)の中で「Future perspectives of physiological anthropology」と題した記念セッションが設置されました(図 1)。

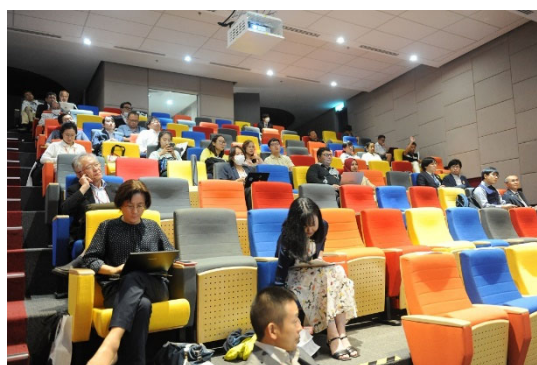


図 1. セッションの様子

セッションの座長は現 JPA 編集委員長の樋口重和先生が務められ、講演者として元 JPA 編集委員長の安河内朗先生, Executive editor の Douglas E. Crews 先生, Editor の Barry Bogin 先生の 3 人が登壇されました。樋口先生からの開催趣旨説明に続き, まずは安河内先生から「History and trends of study in physiological anthropology」と題し, JPA の歩みやこれからの展望に関するご講演がありました(図 2)。続いて Crews 先生から「The growth of

physiological anthropology and its close association with human biology in the USA)に関するご講演をいただきました。Crews 先生は 13 時間の時差の中、アメリカから深夜 2 時にオンライン講演してくださったのですが、残念ながら途中で(というかかなり早い段階で)接続トラブルにより音声が届かなくなってしまい、会場も Crews 先生もわやわやになっていました。気を取り直して Bogin 先生から「Physiological Anthropology in Transition」とのご講演があり(図 3)、さらに Bogin 先生のご講演後に接続が復活した Crews 先生から早口で講演の続きをしていただきました。



図 2. 大会長の Ahmed 先生(左)と安河内先生(右)



図 3. 大会長の Ahmed 先生(左)と Bogin 先生(右)

実はこのセッションの開始前から Crews 先生との接続について現地技術スタッフと共に気をもんでいて、3 題のご講演の内容については

ほとんど記憶に残っていないことをここに告白します。これらのご講演については、今後 JPA 誌上に何らかの形で記事が載る可能性がありますのでお楽しみにお待ちください(申し訳ありません)。

2. フロンティアミーティング JPA40 周年記念ディスカッション

2023 年 11 月 18 日に開催された 2023 年度フロンティアミーティング(秋期)(日本橋ライフサイエンスビルディング)において、「記念ディスカッション」を開催させていただきました。記念ディスカッション冒頭には初代・第 3 代編集委員長の柄原裕先生(図 4)、第 5 代編集委員長の勝浦哲夫先生(図 5)にご登壇いただき、お祝いのご挨拶をいただきました。



図 4. 柄原先生



図 5. 勝浦先生

栃原先生からは学術誌立ち上げの頃の熱い議論の様子を、勝浦先生からは Web of Science 収録(インパクトファクター(IF)取得)に至るご苦労などをお話いただき、今ある JPA は関わられた多くの先生方のご尽力の賜物であることを再認識しました(また胸が熱くなる私)。続くディスカッションは直近 10 年間に編集委員長をお務めの安河内朗先生、中村晴信先生、樋口重和先生の 3 人にご登壇いただき(図 6, 7), 恒次が進行を担当して行われました。「JPA の学術誌としての位置付け」「JPA のインパクト向上」「今後の展望」といったテーマを大まかに設定し、各先生から話題提供、その後議論という流れで全体で小一時間ほどという構成です。安河内先生からは JPA が扱う分野(≒JPA を引用する雑誌)が多様であること、その状況をふまえて生理人類学のコアとしてのオリジナリティを確立することが重要であることが指摘されました。中村先生からは JPA や分野の近い雑誌(American Journal of Physical Anthropology, Annals of Human Biology など)の IF に関する多くのデータをご紹介いただくとともに、雑誌の IF を上昇させる方策と学術誌としての望ましいあり方の追求が同調する部分としない部分があるという興味深いお話をいただきました。また、樋口先生は JPA への投稿はアジアの国々が中心である一方、閲覧は欧米からも多くなされているというデータから、今後は投稿・掲載もより国際性(地理的多様性)を高められるのではないかとの見解をお話しになりました。ディスカッションを重ねるうちに、最終的には「これからの生理人類学はいかにあるべきか」という議論になっていたことが印象深かったです。最後に安河内先生からより時間をかけてこのような議論を深めるべきとのご発言もありました。



図 6. 中村先生(左)と安河内先生(右)



図 7. 樋口学会長(兼現 JPA 編集委員長)

JPA 記念ディスカッションに引き続いて行われたフロンティアミーティングの懇親会は、JPA40 周年記念祝賀会を兼ねて開催いただきました。これからの JPA や生理人類学を担う若い研究者も多く参加された場で和やかに 40 周年をお祝いできて良かったと思います。ディスカッションの場とともにお祝いの場も設定していただいたフロンティアミーティングの事務局の皆様がこの場をお借りしてお礼申し上げます。当日は現在 Springer Nature 社で JPA を担当くださっている小林眞代氏とともに、小林氏の前にご担当くださっていた石井奈都氏も駆けつけてくださるというサプライズもありました。JPA が Web of Science に収録され、その後 IF が順調に向上しているのは Springer Nature 社のサポートも大きいのではないかと考えています。同社の JPA 担当の皆様にも紙面をお借

りして感謝申し上げます。

会員の皆様におかれましては今後とも JPA への積極的なご投稿をよろしくお願い申し上げます。JPA50 周年記念も晴れやかにお祝いできるように祈念しつつ、報告を終わります。

■ICPA2023 開催報告

西村貴孝(九州大学)

2023 年 9 月 7 日～8 日の 2 日間にわたり、16th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA2023) が Universiti Malaysia Sabah(UMS; マレーシア大学サバ校)にて、大会長・Kamruddin Ahmed 先生(図 8)の下、開催されました。

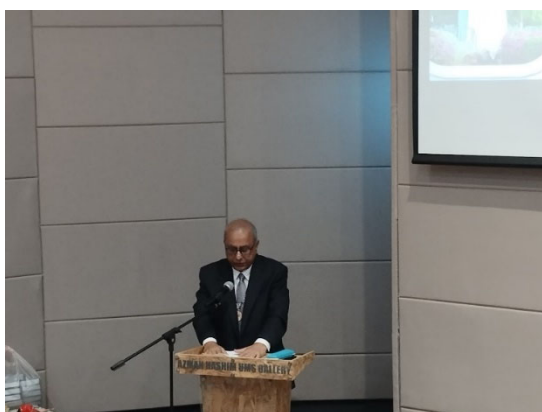


図 8. 大会長の Ahmed 先生

UMS はボルネオ島の北部に位置するサバ州の州都コタキナバルにあります。UMS は南国の豊かな自然に囲まれた広大なキャンパスを有し、その中でも最近建設された主に会議やシンポジウムに用いられる Gallery Azman Hashim が会場となりました。会議のテーマは Environment and Human Health であり、気候変動により我々の生活環境が変わり続ける中で、どのように環境に適応し、健康を維持していくのが議論の中心でした。具体的には人獣共通感染症であるマラリアへの対応、すなわち感染経路・リスクの疫学的解析、GPS やド

ローンを用いた地理的解析など、古典的な手法に加え、最新の技術を用いたダイナミックな解析も報告され、大変勉強になりました。地球温暖化が続けば日本も沖縄以外の地域も亜熱帯にシフトしていくと予想され、熱帯特有の感染症への対策など今から備えるべきこともあると感じました。生理人類学のコアトークとしては、Future Perspective of Physiological Anthropology が開催され、樋口重和先生(司会)によるオープニングトークの後、Douglas Crews 先生、Barry Bogin 先生、安河内朗先生が登壇され、それぞれの立場から生理人類学がこれまでやってきたこと、そして未来に向けてやるべきことを俯瞰的な立場からお示し頂きました。個人的に Bogin 先生の愛と希望がヒトを成長させるという話に妙に納得しました。表裏一体の心身の健康維持のために、うつや疲労などのネガティブ要因の特定・解消も大事ですが、日々の生活に愛と希望があれば人間ナントカやっていけるなとも思い、飲み会や遊びの回数を増やさねばと帰国後の生活に前向きになりました。学術的な側面以外にも大会長の Ahmed 先生のお取り計らいにより、ランチやコーヒブレイク、会場と中心地を往復するバスの手配など、広大なキャンパスにも関わらず快適に過ごすことができました。また懇親会(図 9)は伝統的なボルネオ島の豊富な海産物を中心とした料理や、先住民のダンスや音楽、吹矢のデモンストレーションなどあつという間に時間が過ぎてしまいました。会期後も Journal of Physiological Anthropology の拡大英文編集委員会や若手向けのセミナー等が開催され、そのあと観光したりと、最後まで有意義な時間を過ごしました。

今回、久しぶりにコロナの制限がほとんどない中での開催となり、参加者及び演題数:93

名(日本人 49 名, 海外 44 名), 口頭発表・ポスター発表が計 33 演題の盛会となりました. お忙しい中, ご参加いただいた皆様に, 篤く御礼申し上げます. 参加者の皆様におかれましては, 短い期間ではありましたが, 南国の解放的な雰囲気の中, ゆっくりとした時間を過ごされたことと思います. 今後とも, 定期的な国際会議の開催に向けて準備を進めていき, 次回大会(ICPA2025)の詳細が決まりましたら情報を発信していきますので, また現地にて皆様とお会いできることを楽しみにしております.



図 9. 懇親会の様子

■ 2023 年度夏季セミナー開催・参加記

赤間章英(前橋工科大学)

この度, 2023 年度日本生理人類学会夏期セミナーの実行委員長を務めさせて頂きました, 前橋工科大学の赤間でございます. 今年は, 8 月 17, 18 日の二日間, 東京都八王子市にあります大学セミナーハウスにて夏期セミナーを開催致しました. COVID-19 の影響によりしばらくぶりの開催となりましたが, 私にとって日本生理人類学会の夏の風物詩といえば「夏期セミナー」と思えるほど印象深い学会イベントだったので, 今回, 主催者として開催することができて本当に良かったと心より思っております. 歴代の実行委員の先輩方が作り上げてくださ

った和やかでも活気のある研究交流の場を再現しようと, 手探りながらも新たな試みをしてまいりましたので, それらを振り返りながら, 当日の様子を皆さまにご紹介させていただきます.

1 日目は, 特別企画としてキャリアパス講演「職業としての“生理人類学者”について」を行いました. こちらの講演では, 国立環境研究所の高倉潤也先生と関西医科大学の安河内彦輝先生に講演者としてご登壇頂きました(図 10). まず, 事前に撮影していた両先生のインタビュー動画を参加者の方々と共に視聴し, その後, 事前に募集していた, 文献調査や論文執筆のコツなど若手研究者ならではの質問や悩みにお答えいただきました. 質問の中にあつた研究に対するモチベーション維持に関して, やり続けるうちに自ずと湧いてくるという両先生からのお答えには共感すると共に, その積み重ねが研究者としての高倉先生, 安河内先生を形成しているのだなと改めて認識致しました. 自分もそのように有りたいと大変励みになったことを, 今, 執筆しながら思い返しております. 講演の最後には, 今回参加頂いた若手研究者の方々に向けて両先生から暖かいメッセージを頂きました.



図 10. キャリアパス講演の様子

講演者の安河内先生(左)と高倉先生(右)

1 日目は他にも, 計画段階や実験途中などの萌芽的研究を発表する場として若手研究発表を行いました. 今回の若手研究発表は全て

ポスター発表としており、はじめに発表内容に関するフラッシュプレゼンを行った後、自由討論に移りました(図 11)。自由討論は 1 時間半ほどの時間を設けていたのですが、参加者の方々からはもっと時間が欲しかったというお声を頂くほど、活発な意見交換が行われておりました。おそらく学部生にとっては初めての研究発表の場になったのではないかと思います。各々の研究計画に対して改善点や発展可能性に関する的確なコメントを多数頂けたようで、今回の発表を通じて自身の研究がブラッシュアップしていくさまは各自のモチベーションアップにもつながったことと思います。

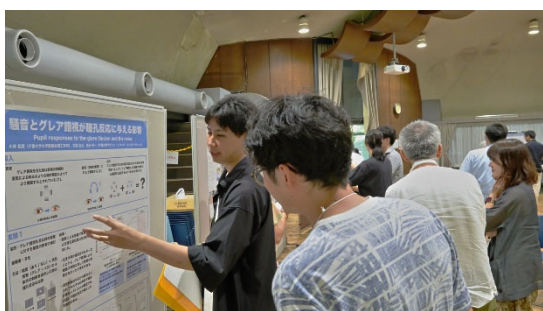


図 11. 若手研究発表の様子

夕食を挟み、1 日目の最後には若手の会企画と懇親会を開催致しました。若手の会企画では、参加者の方々を 5 つのグループに分けて、実際にあったことやこれから起こると思うことを年表にまとめて発表する企画を行いました。どのグループもユニークな年表を作成しており、あるグループでは太陽が生まれたときからこれまでの人類の歩みをまとめていたり、また別のグループでは将来、私(赤間)の子供だけで野球チームができるようになると予言?していたりと、個性豊かな発表がされました。この企画を通じて、互いに打ち解けた交流できたようで、続く懇親会も和気藹々とした中で行われました。

2 日目は午前と午後に分けて「R, Rstudio 体験講習会」を行いました。こちらの講習会では

労働安全衛生総合研究所の西村悠貴先生に講演者としてご登壇頂きました。午前の部では、R および Rstudio がどういったソフトウェアなのか、研究におけるメリットはなにか、また、午後の部でも取り扱う、R パッケージ*の一つである tidyverse についてご解説いただきました。こちらはハイブリッド方式で開催しており、現地参加できなかった方もご参加いただけるように致しました。R, Rstudio に対する理解度は参加者によって様々でしたが、西村先生の講演は、今回の講習会で初めて触れるという方にとっては何ができるのかを学ぶ機会に、既に自身の研究で使用している方にとっては tidyverse での程度作業効率化が見込めるのかを改めて学ぶ機会になりました。

昼食を挟んで、引き続き開催されました「R, Rstudio 体験講習会」午後の部では、事前アンケートを元に参加者を初級者・中級者・上級者に分け、実際に手を動かしながらグループで与えられた課題に取り組んでいくハッカソンスタイルで講習会を行いました。初心者グループでは、データの操作(csv データの読み込みやデータの並びの操作など)に挑戦してもらい、中級者のグループではデータの図示に挑戦してもらいました。上級者の方々は、自身が R, Rstudio の操作で行き詰まっているところを西村先生に個別相談してもらいました。課題すべてを解けたグループもそうでなかったグループもございましたが、講習会終了後に、参加者の方々から実践的に学ぶことで理解が深まったとのお声を頂戴致しました(図 12)。

今回の参加者は 35 名を超え、若手を中心として活発な研究交流が行われました。来年度以降もこの夏の風物詩が続いてゆき、また皆さまとお会いできることを楽しみにしております。最後になりましたが、この場をお借りいたしまし

て、参加者の皆様、実行委員の皆さま、そして、ご講演くださいました高倉先生、安河内先生、西村先生に感謝申し上げます。

*…パッケージとは、特定の機能を拡充するために関数やデータセットをまとめたもの。



図 12. 「R, Rstudio 体験講習会」午後の部の参加者集合写真

■学会各賞受賞者の言葉

「日本生理人類学会学会賞を受賞して」

工藤奨(九州大学)

この度は、日本生理人類学会学会賞を頂戴し、誠に光栄に思います。2003 年九州大学で開催された大会に初めて参加し、あれから 20 年もたったんだというのが今の気持ちです。そして、この 20 年間、学会の先生方には本当にお世話になり、先生方には大変感謝しております。

振り返ると、私の研究の出発点は、“細胞がどのように力を感じているのか？”というものでした。競争相手が非常に多く、独自性を出すことがなかなか難しく、自分自身の研究に行き詰まりを感じていた頃、佐藤方彦先生に学会に誘われ、大会に参加したことが入会したきっかけです。研究対象がヒト個体～集団まで、私が全く考えていなかった分野でしたので、当時の私にはとても新鮮にうつりました。休憩室でぼーっとしていると、樋口重和先生、前田享史先生に声をかけてもらい、意気投合、懇

親会、芸工大での二次会へと勢いで参加し、朝まで飲み明かしたことが思い出されます。とってもフレンドリーな学会だなーという印象を抱きました。そして、今でもその雰囲気は継承できていると思っています。

学会での活動は、研究部会を立ち上げ、新しい風を入れようと頑張ったことや、企画担当理事として土曜会や卒論発表会を企画したことを思い出します。頑張って学会活動に取り組んでたところ、2006 年第 55 回大会を芝浦工業大学で開催することを任されました。同年 10 月には、鎌倉建長寺で The 8th International Congress of Physiological Anthropology の開催が決まっており、そちらの準備も重なり、我ながらよく頑張ったなと思います。他にも多くの学会の運営に携わることができ、大変でしたが多くの先生方に支えられながら充実した時間を過ごすことができました。先生方、大変ありがとうございました。

研究面では、私自身の研究の幅を広げることができ、本会には大変感謝しております。特に、個人差について考えるきっかけをもらったのは本学会でした。私の研究の出発点であった、“細胞がどのように力を感じているのか？”は 2021 年ノーベル賞を受賞し、私が受賞したわけではないですが、私が続けていた研究分野が受賞したことに感動を覚えました。と同時に一区切りついた気持ちになりました。今は、本会のおかげで個人差出現メカニズムの解明へと興味はシフトし、道半ばですが、あれやこれやと考えているところです。会員皆さまのお力添えを頂きながらメカニズムを明らかにしたいという思いで、これからも研究活動を頑張っていきたいと思っています。

本会では、本当に多くのことを学ぶことができ、お世話になりました先生方には、改めて感

謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。今後ともご指導どうぞよろしくお願いいたします。

「優秀研究賞を受賞して」

北村真吾(国立精神・神経医療研究センター)

この度は、日本生理人類学会優秀研究賞という栄えある賞を授賞頂き誠にありがとうございます。選考委員の先生方をはじめ、学会関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。これまでの研究活動を導き、支えて下さった皆様にご場を借りてお礼申し上げます。

今回の授賞対象となった研究は、現在の所属である国立精神・神経医療研究センターで行ったヒトの睡眠・生体リズム機能の生理的基盤とその失調による健康影響に関する一連の研究です。睡眠や生体リズムは我々にとって非常に身近な機能でありながらその重要性は長い間看過されており、我が国でも社会的関心が高まってきたのはここ 10 年ほどに感じます。特にヒトの睡眠・生体リズム機能については、他の動物種と異なる複雑性を持つと考えられ動物研究からの外挿では理解が難しく、今もその調節メカニズムについては議論が続いています。幸いにも私が所属する国立精神・神経医療研究センター睡眠・覚醒障害研究部は睡眠・生体リズムの国内主要拠点のひとつであり、当時の部長である三島和夫先生を中心に、保有する大規模な時間隔離実験室を用いて概日リズム睡眠覚醒障害の病態生理の解明や必要睡眠時間に関する研究などで一定の貢献を行うことができたように思います。その他にも分子生物学を専門とする肥田昌子先生、機能画像が専門の守口善也先生など、多彩な人材による学際的なチームで多くの学びがありました。こうした機会を頂けたこ

とは僥倖という他ないのですが、曲がりなりにも成果に資することができた大きな要因として、「個人差」や「適応」といった(チーム内では)独自の生理人類学的な視点があったように思います。「8 時間睡眠」や「朝型生活」などは固定的な基準の代表ですが必ずしも各個人に適用できるものではなく、個人差や可塑性をもつものということをさまざまな局面で感じ、生理人類学の価値を改めて実感しております。

いまだ学びの途上ではありますが、受賞に恥じないよう睡眠・生体リズムの研究活動を進め、生理人類学の発展に貢献できるよう努めて参ります。今後ともご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

「閉経後女性における体組成と骨量との関連—優秀論文賞を受賞して—」

水上諭(長崎大学)

この度は、日本生理人類学会優秀論文賞という栄誉ある賞を賜り、誠にありがとうございました。査読を担当して頂いた先生方、選考委員の方々および学会関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

今回受賞の対象となった論文「Association between fat mass by bioelectrical impedance analysis and bone mass by quantitative ultrasound in relation to grip strength and serum 25-hydroxyvitamin D in postmenopausal Japanese women: the Unzen study」は、閉経後女性において、体組成の内、脂肪量、筋肉量のどちらが骨量に関連するかを調査したものです。理学療法士である私は、筋肉量が骨量に関連するという仮説で解析を始めましたが、結果は異なるものでした。高齢者は「やせ」に弱いこと、男女で「脂肪」を蓄える時期が異なり、女性は閉経後に顕著になることなど、改めて

「脂肪」の意味を考えさせられる機会となりました。生理人類学の観点から体脂肪と骨量の変動は環境や生活状況の変化に対する人類の適応能を理解する一助になると考えます。今後はアディポカインやマイオカインの測定を加えた研究をしていきたいと考えています。

最後に、今回の受賞にあたりご指導いただきました長崎大学青柳潔教授、有馬和彦准教授、所属研究室の皆様、検診会場でのデータ収集にご尽力くださいました皆様にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

「2023 年度論文奨励賞を受賞して」

大橋路弘(九州大学)

この度は私達が JPA に投稿させて頂いた論文「Intake of L-serine before bedtime prevents the delay of the circadian phase in real life」を論文奨励賞に選考いただき、誠にありがとうございます。このような栄誉ある賞を頂き、大変光栄に感じるとともに身の引き締まる思いです。

この度の対象論文は、L-serine というアミノ酸の摂取が概日リズムの光同調を強め、日常生活における概日位相の後退(夜型化)を防止することをフィールドでの介入により明らかにした研究で、私が学部・修士と 3 年にわたり取り組

んできたものです。この研究を通じて、研究デザインから手法まで研究の基礎を学びつつ、同時にその面白さを味わうことができました。被験者とオンラインで連絡を取り合って自宅での唾液採取を指示しながら、毎週大量に届く唾液検体の分注に追われていた日々を懐かしく感じます。

また、本論文は私が第一著者として投稿した初めての研究でもあり、研究成果を世に出すことの意義を感じさせて頂きました。学会発表の時には、「睡眠薬以外で患者さんなどに気軽に勧めることのできるものになるといいですね」という言葉を頂き、本研究の成果が一人でも多くの人に届き、概日リズム睡眠覚醒障害や夜型の体内時計の改善の一助になることを願っています。

最後に、本研究を進めるにあたってご指導ご鞭撻を賜りました樋口重和先生と李相逸先生をはじめ有意義なディスカッションを重ねてくださった共著者の皆様、手間の多い実験に付き合ってくださいました被験者の皆様、この研究を高く評価してくださいました審査員の皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

■学会動静

・日本生理人類学会第 85 回大会

大会長:跡見友章(杏林大学)

会期:2024 年 6 月 14 日(金)~16 日(日)

会場:杏林大学井の頭キャンパス

編集後記

今回は JPA40 周年記念関連イベントや ICPA2023, 夏季セミナーの開催報告, 学会各賞受賞者の言葉を掲載することができました. ご寄稿いただいた先生方にこの場をお借りして感謝いたします. 前回の理事会にて樋口学会長が JPA 編集委員長を兼任されることとなり, その新体制の下で JPA40 周年記念関連イベントが開催されました. また, 樋口学会長の元部下である北村先生が優秀研究賞, その門下生である大橋先生が論文奨励賞を受賞され, 今後のご活躍が期待されます. これから本学会は樋口学会長のリーダーシップの下, 新たな領域へ邁進していくと思います. 本誌を通して会員の皆様へ本学会の“今”を伝えていきたいと思います. 宜しくお願い致します.
(小崎)

次号予定

第 85 回大会開催案内(第二報)
フロンティアミーティング(秋)の開催報告など
2024 年 3 月末原稿締切(予定)

PAnews 編集事務局

小崎智照(福岡女子大学国際文理学部環境科学科)

jspa-pr[at]jspa.net